7/10 _{Sat}

第238回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール 14時開演

SATURDAY MATINÉE SERIES No. 238 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

7/11 _{Sur}

第238回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール 14時開演

SUNDAY MATINÉE SERIES No. 238 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮

Principal Conductor

争 Koto

特別客演コンサートマスター

Special Guest Concertmaster

ロッシーニ ROSSINI

HUSSIIVI

藤倉 大 DAI FUJIKURA

[休憩] [Intermission]

ブラームス BRAHMS

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.4

SEBASTIAN WEIGLE

LEO –*p.6*

LE0

日下紗矢子

SAYAKO KUSAKA

歌劇 〈セビリアの理髪師〉 序曲 [約8分] -p.7

"The Barber of Seville" Overture

筝協奏曲 [約20分] −*p.8*

Koto Concerto

交響曲 第2番 二長調 作品73 [約43分] -p.9

Symphony No. 2 in D major, op. 73

- I. Allegro non troppo
- II. Adagio non troppo
- III. Allegretto grazioso (Quasi andantino)
- IV. Allegro con spirito

※当初の発表から出演者および曲目が一部変更されました。

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

共催:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

^{太元 章} 独立行政法人日本芸術文化振興会

7/21 Wed

第610回 定期演奏会 サントリーホール 19 時開演

SUBSCRIPTION CONCERT No. 610 / Suntory Hall 19:00

指揮

Conductor

特別客演コンサートマスター

Special Guest Concertmaster

モーツァルト

MOZART

飯守泰次郎 -p.5

TAIJIRO IIMORI

日下紗矢子 SAYAKO KUSAKA

交響曲 第35番 二長調 K. 385 **〈ハフナー〉** [約18分] -p.10

Symphony No. 35 in D major, K. 385 "Haffner"

- I. Allegro con spirito
- II. Andante
- III. Menuetto

IV. Prest

[休憩] [Intermission]

ブルックナー

BRUCKNER

交響曲 第4番 〈ロマンティック〉 変ホ長調

WAB 104 (第2稿/ノヴァーク版) [約70分] -p.11

Symphony No. 4 in E flat major, WAB 104 "Romantic"

(2nd version / Nowak edition)

- I. Bewegt, nicht zu schnell
- II. Andante quasi Allegretto
- III. Scherzo: Bewegt
- IV. Finale: Bewegt, doch nicht zu schnell

※当初の発表から出演者および曲目が変更されました。

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)

*** 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力: **アフラック**

7/10 +曜マチネー

7/11

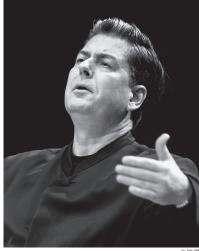
Marstro

指揮

セバスティアン・ヴァイグレ

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

高らかに響くフィナーレ! ドイツ本格派が振る ブラームスの田園交響曲



©読響

オペラとコンサートの双方で活躍が目覚ましい名匠。得意のドイツ物から、ロマン派の大家ブラームスの交響曲第2番を振り、叙情に満ちた懐かしいメロディーを美しく歌い上げる。

1961年ベルリン生まれ。82年からベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者として活躍後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者に転向。2003年にフランクフルト歌劇場でR.シュトラウス〈影のない女〉を振り、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれた。04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務め、ベルク〈ヴォツェック〉やワーグナー〈タンホイザー〉など数々の名演奏を繰り広げた。07年から11年までバイロイト音楽祭にてワーグナー〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉を指揮し、世界的注目を浴びた。08年からフランクフルト歌劇場音楽総監督の任にある。11年に同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に選ばれ、15年、18年、20年にも同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に輝くなど、その手腕は高く評価されている。

これまでに、メトロポリタン歌劇場、ベルリン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場などに客演を重ねるほか、ザルツブルク音楽祭にも出演、また、ベルリン放送響、ウィーン響などを指揮し、国際的に活躍している。読響には16年8月に初登場。オペラでは19年の東京二期会のR.シュトラウス〈サロメ〉(第28回三菱UFJ信託音楽賞受賞)、今年2月のワーグナー〈タンホイザー〉などで共演し、いずれも好評を博した。

指揮

飯守泰次郎

TAIJIRO IIMORI, Conductor

80歳の巨匠が腕を振るう深遠なるブルックナー



欧州でのキャリアが豊富な日本を代表する巨匠が、今回46年ぶりに《読響定期》 に登場。モーツァルトとブルックナーの傑作を指揮し、ドイツ音楽の神髄に迫る。

1940年旧満州・新京生まれ。桐朋学園大学卒業。64年から70年まで読響の副指揮者、その後76年まで指揮者を務めた。67年からは並行して海外でも活動し、ブレーメン、マンハイム、ハンブルク、レーゲンスブルクの各歌劇場の指揮者、エンスへデ歌劇団第一指揮者を歴任、オペラ指揮者として確固たる実績を築き上げた。70年からはバイロイト音楽祭の音楽助手として数々の歴史的公演に加わり、同音楽祭の当時の総監督ヴォルフガング・ワーグナーから「飯守こそドイツ語でKapellmeisterと呼ぶにふさわしく、そこには"マエストロ"という言葉以上に大きな尊敬の念が込められている」と絶大なる信頼を得た。

90年代以降は国内で名古屋フィル、東京シティ・フィル、関西フィルの常任指揮者を歴任し、古典派からロマン派にかけてのレパートリーを根幹に、意欲的な活動を展開。2014~18年には新国立劇場の第6代オペラ芸術監督を務めた。17年には同劇場主催公演で初めてピットに入った読響と〈神々の黄昏〉で名演奏を残すなど、〈ニーベルングの指環〉四部作を含むワーグナー作品で高い評価を得た。現在は仙台フィルの常任指揮者、東京シティ・フィルおよび関西フィルの桂冠名誉指揮者の地位にある。これまでにサントリー音楽賞、大阪市市民表彰、日本芸術院賞など受賞多数。04年紫綬褒章、10年旭日小綬章を受章。また、12年度の文化功労者に選ばれ、14年から日本芸術院会員となっている。



日曜マチネー





箏 **LEO**

LEO, Koto

ジャンルを超えて筝の新たな魅力を追求する新星。 当初4月30日の《読響・第641回名曲シリーズ》 で世界初演する予定だった筝協奏曲を、聴衆の前 で初めて披露する。1998年横浜生まれ。横浜イ ンターナショナルスクールで9歳のときに筝と出 会い、カーティス・パターソンの指導を受け、のち に沢井一恵に師事。14歳で全国小中学生筝曲コ ンクールのグランプリ、「くまもと全国邦楽コンク ール」で史上最年少の16歳で最優秀賞・文部科学 大臣賞を受賞した。一躍脚光を浴び、2017年に アルバム 『玲央 lst』 でメジャーデビュー。 これまで、 秋山和慶、沖澤のどかの指揮で東京フィル、神奈川 フィルと共演している。TBS系テレビ「情熱大陸」、 テレビ朝日「題名のない音楽会」など多くのメディ アに出演。第29回出光音楽賞受賞。現在、沢井筝 曲院講師。東京芸術大学在学中。

ロッシーニ 歌劇〈セビリアの理髪師〉序曲

ジョアキーノ・ロッシーニ (1792~1868) が書いたオペラ・ブッファ (喜劇的オ ペラ) のなかでも、もっとも広く知られる傑作が〈セビリアの理髪師〉。この軽快な 序曲を筆頭に、"私は町のなんでも屋"や"今の歌声は"といった名曲がちりばめら れた19世紀版ラブコメである。

曲名の〈セビリアの理髪師〉とは、このオペラの主人公フィガロを指す。美しい 娘ロジーナに一目ぼれをしたアルマヴィーヴァ伯爵のために、理髪師でなんでも屋 のフィガロが機転を利かせる。伯爵は貧しい学生に扮してロジーナに近づき、大 騒動の末に最後は身分を明かして、ふたりはめでたく結ばれる。原作はボーマル シェ。同じ原作者によるモーツァルトの歌劇〈フィガロの結婚〉の前日譚に相当する。 いかにもドタバタ喜劇を思わせる快活さにあふれるが、実はこの序曲は旧作か らの転用である。多忙の人気作曲家ロッシーニはしばしば同じ曲を複数の作品に 使いまわした。約3週間で書きあげられたという〈セビリアの理髪師〉だが、速筆 のロッシーニも序曲までは用意できず、旧作〈イングランドの女王エリザベッタ〉の 序曲が転用された。しかもこの〈イングランドの女王エリザベッタ〉序曲も、〈パル ミラのアウレリアーノ〉序曲からの流用である。よいと思えば何度でも使う作曲者 の現実的な姿勢があらわれている。

開幕を短く告げる強奏に続いて、ひそひそとささやくように弦楽器が続く。短い フレーズをくりかえしながら次第に音量を増す得意の「ロッシーニ・クレッシェンド」 が期待感を煽る。本編とは無関係とわかっていても、ついフィガロの活躍や伯爵と ロジーナのロマンスを連想してしまう。達人の筆が生んだ汎用型序曲とでも呼ぶ べきか。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲 (歌劇): 1816年/初演 (歌劇): 1816年2月20日、ローマ、テアトロ・アルジェンティーナ/: 演奏 時間:約8分

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、 打楽器 (大太鼓、シンバル)、弦五部

日曜マチネー

藤倉 大 箏協奏曲

藤倉 大

この曲は、若きソリストLEOさんから個人委嘱を受けて作りました。この前に、LEOさんに僕が書いたソロの作品「竜」がベースになっています。

「竜」を作る時、LEOさんと頻繁にやり取りしました。最初は数年前の年末にオンラインで。僕はまず、箏を選んだ理由を聞きました。人生の多くの時間をある楽器に捧げる決意には、何か強い理由があるはずだから。演奏家の楽器への思いは、必ず作品を作る上でのインスピレーションにします。その日LEOさんと試した奏法、コンビネーションが僕の頭から離れず、作曲に取り掛かるのは少し先を予定していたのに、気が付いたら冒頭の断片を書いていました。その断片の演奏録音がLEOさんから勢いよく毎日数回届き、聴くと続きが書きたい……これを繰り返しました。

日本の楽器に曲を書く時、僕は必ずその楽器の伝統的な奏法を研究します。 そこには、西洋音楽では実験的奏法になる技法が、もう何百年も使われています。それらをどう組み合わせたら、今までにないような日本の伝統楽器のための音楽になるのか、それでいてその楽器の、そして奏者の良さが炸裂する音楽になるかを、奏者と一緒に研究して作っていきます。

オーケストラの部分は、筝から出る音がどう拡大されるか、それは音量の拡大ではなく、音楽のイメージとして広がるか、を目指して書きました。筝に羽が付き、筝のパートが羽ばたいていくのをオーケストラが助ける、といった感じでしょうか。オーケストラはその想像上のスーパー筝の一部として、筝と一体化する……そんなことを夢見て作りました。

作曲: 2020年/初演: 2021年4月30日、サントリーホール (無観客収録) / 演奏時間: 約20分楽器編成/フルート2 (ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、打楽器 (ヴィブラフォン)、弦五部、独奏箏

■藤倉 大 Dai Fujikura

1977年大阪生まれ。15歳で渡英し、ジョージ・ベンジャミンらに師事。ザルツブルク音楽祭、BBCプロムス、シカゴ響などから作品を委嘱され、国際的な共同委嘱も多い。数々の著名な作曲賞を受賞し、2017年には革新的な作曲家に贈られるヴェネツィア・ビエンナーレ音楽部門銀獅子賞を受賞。東京芸術劇場で開催される、世界中の"新しい音"が聴ける「ボンクリ・フェス」のアーティスティック・ディレクターを務めている。録音はソニーミュージックや自身が主宰するMinabel Recordsから、楽譜はリコルディ・ベルリンから出版されている。

ブラームス

交響曲 第2番 二長調 作品73

ドイツ・ロマン派の大家ヨハネス・ブラームス (1833~97) が残した四つの交響曲は、ベートーヴェン以来の傑作との誉れ高い。そのうち第1番は、20年に及ぶ労苦の末、43歳にして世に出された。そして翌1877年、肩の荷が下りたのか、今度は1年もかけずに第2番が完成された。ブラームスは同年、アルプスを望む南オーストリアのヴェルター湖畔の村ペルチャッハで夏を過ごし、風光明媚な環境にも後押しされて本作を一気に作曲した。そして10月に完成した本作は、12月ウィーンで初演され、第3楽章がアンコールされるなど大成功を収めた。

この曲は、祝典的な音楽で重用された二長調の調性と、彼の交響曲の中で唯一、短調の楽章が存在しない点も相まって、明るさやのどかな幸福感が横溢している。 だが同時に、寂寥感、哀感を湛えた部分や、推進力に富んだ部分も多く、そうした 諸要素の混在がブラームスならではの深みをもたらしている。

冒頭にチェロとコントラバスで柔らかく出される「ニー嬰ハーニ」の3音が曲全体の基本動機となり、形を変えて随所に登場する。また彼の交響曲の中で唯一チューバが用いられ、トロンボーンと共に柔らかな響きを作り出すのも特徴的だ。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロッポ 3拍子の牧歌的な楽章。序奏もなく呈示される第1主題と温かく流麗な第2主題を中心に、明朗かつ豊麗な音楽が展開される。 第2楽章 アダージョ・ノン・トロッポ 息の長い音楽が綴られていく、若干憂いを帯びた緩徐楽章。冒頭でチェロが出す寂しげな主題を軸に進行し、途中で木管

楽器が出す優美な主題が対照される。

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ(クアジ・アンダンティーノ) オーボエの素朴な主題に始まる舞曲風の楽章。急速な部分が2度挟まれる。

第4楽章 アレグロ・コン・スピーリト ざわめくような第1主題と喜びを湛えて広がる第2主題を軸に進む、輝かしく活気に充ちたフィナーレ。最後の畳み込みは圧巻だ。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲: 1877年/初演: 1877年12月30日、ウィーン/演奏時間: 約43分 楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、 チューバ、ティンパニ、弦五部



Program Notes

西洋音楽の世界には、交響曲にさまざまな愛称をつける習慣がある。時計、運命、春、巨人……。ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)の交響曲 K.385もまた、〈ハフナー〉なる別称を持つ。これは作曲の経緯に由来している。

モーツァルトは1782年7月、ザルツブルク市長の息子で幼馴染のジークムント・ハフナーが貴族に叙せられるという手紙を、父レオポルトから受けとった。同時にその祝典のために音楽を書くよう依頼される。

ひどく忙しい時期だったため、モーツァルトは少しずつ作曲し、できあがった楽章から五月雨式にザルツブルクに送った。最初にアレグロ楽章、次にメヌエットとアンダンテといった具合。8月7日にはすべての楽章が揃ったが、どうも式典には間に合わなかったらしい。

このときモーツァルトが書いたひと揃いは、行進曲K.6385aを含んでいた。作曲家はのちに、その行進曲を取り除き、冒頭楽章の繰り返しをなくして、両端楽章の楽器編成にフルートとクラリネットを2本ずつ加えた形で初演した。これが今日、4楽章からなる交響曲ニ長調として知られている。

第1楽章ではなんといっても、祝祭的な気分にあふれた冒頭部分が耳を引く。2 オクターブを一気に上り下りする音程。そこに付点の鋭いリズムを掛け合わせる。 バロック期にもてはやされたフランス風序曲の趣が濃厚に残っている。式典やコンサートの開始にまことにふさわしい。

それをいっとき中和するかのように、第2楽章と第3楽章では、分散和音で上昇したのち、隣り合った音へと進む主題が顔を出す。第4楽章もその音運びを踏襲するが、作曲家はそこに、第1楽章のテイストを紛れ込ませる。つまり、開始部の下行音形に幅の広い完全四度を使って、冒頭楽章の大柄な楽想を聴き手に思い出させるといった寸法だ。推進力のあるロンドは当時も、演奏会場を大いに盛り上げただろう。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲: 1782~83年、ウィーン/初演: 1783年3月23日、ウィーン・ブルク劇場/演奏時間: 約18分 楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、 弦五部

ブルックナー

交響曲 第4番 (ロマンティック) 変ホ長調 WAB 104 (第2稿/ノヴァーク版

7/2 ^{定期}

Togram Note

ザンクト=フロリアンとリンツを経て、アントン・ブルックナー (1824~96) が ウィーンにやって来たのは1868年。宮廷礼拝堂の暫定オルガニストの職を手に入れ、政府からは個人年金と、「交響的な大作を書く」ための補助金とを得る。ただし1878年までオルガニスト職は無給。リサイタルの機会もほとんどない。政府の助成も十分な額ではなかった。

作曲家は自作品を出版し、その売れ行きに応じて収入を得るというのが、当時のビジネスモデルだ。しかし、ブルックナーはそもそも "売れる" 作品を書かなかった。家庭でアマチュアが演奏できるような曲は、1884年の弦楽五重奏曲ただひとつ。交響曲や教会音楽は出版したところで皆が皆、買うような代物ではない。出版社はこうした作品を刷るのをためらった。政府が交響曲に出版助成金を出していたのには、そんな理由がある。

とはいえ、交響曲が聴衆に見放されていたわけでない。実際、1881年にウィーンで行われた第4交響曲の初演は、ブルックナーの作品としては珍しく成功した。すぐにドイツ語圏各地で再演され、88年にはニューヨークでも舞台に掛けられた。上演自体はここまで成功しながら、楽譜の出版交渉は難航。家庭用としての売れ行きが見込めなければ、版元は出版に二の足を踏む。89年になりやっと、ウィーンのアルバート・グートマン社が手を挙げ、初版を発行する運びとなった。

出版のいきさつと話は前後するが、作曲の経緯は次の通り。ブルックナーは1874年の初めに第4交響曲に着手し、その年の11月に第1稿を書き上げた。ところがこの第1稿を、演奏することなく放置する。77年に改訂を決意。翌78年に作業を始めた。同年12月には改訂を終え、第2稿を完成させる。さらに79年から80年にかけて第4楽章に手を入れ、第3稿をなす。ブルックナーは、この第2稿(第1・2・3楽章)と第3稿(第4楽章)とで「最新の改訂」とした。今日、第4交響曲と呼ばれているのは、この「最新の改訂」である。

「ロマンティッシェ romantische (独)」なる形容詞は、作曲家自身によって第1稿の時点から用いられている。また、ブルックナーは第4交響曲のところどころに、「教会の塔で朝を告げるラッパが鳴る」「寝覚めの街の門が開き、騎士が馬で表へ駈

け出す」「ロマンティシズムの白鳥の歌」といった詩的な解説も加えている。この 曲に同時代の交響詩のような標題性が顕在化しているわけではない。一方で上記 のようなイメージの肥大化した先に、ブルックナーの音楽があらわれているという のも確かなことだ。

第1楽章、「長長短長」とホルンの奏でる第1主題が重要。朝もやから現れてきたような響きだが、長短のメリハリの効いた韻律のおかげでくっきりと像を結ぶ。ヴァイオリンによる第2主題の「短短長」は、第1主題と同じくその語尾は「長」だが、柔らかさがずいぶん違う。このコントラストは決定的だ。この第2主題の柔和な表情のおかげで、第1主題のどこか決然とした印象が強まる。

さて、変ホ長調は管弦楽にとって絶妙の調だ。雄大な楽想を示すのによく用いられる。というのも、この調の第3音(主和音の長3度音)がヴァイオリンの最低音(G線の開放弦)と一致しているから。もっとも数の多いヴァイオリンの一群が、開放弦でこの音を豪壮に鳴らす。こうした楽器法が、作品の迫力作りに一役買っている。

第2楽章は五つの部分からなる。行進曲風のAとヴィオラ主体の幻想的なBとが交互にあらわれる。Aはそのたびに変奏され、3度目の登場でとりわけ大規模に。スケルツォの第3楽章は、作曲家によれば「狩の音楽」。トリオ部はオーストリアの舞曲レントラーだ。

第4楽章の冒頭からしばらくの間、下行音形が形を変えずにその音価だけを短くしていく。するとエネルギーが徐々に堆積していくかのように感じられる。作曲家はそれを頂点で爆発させる。単純だが効果的な書法。こうしたエネルギーの堆積と爆発こそが、楽章全体を貫く背骨といってよい。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉